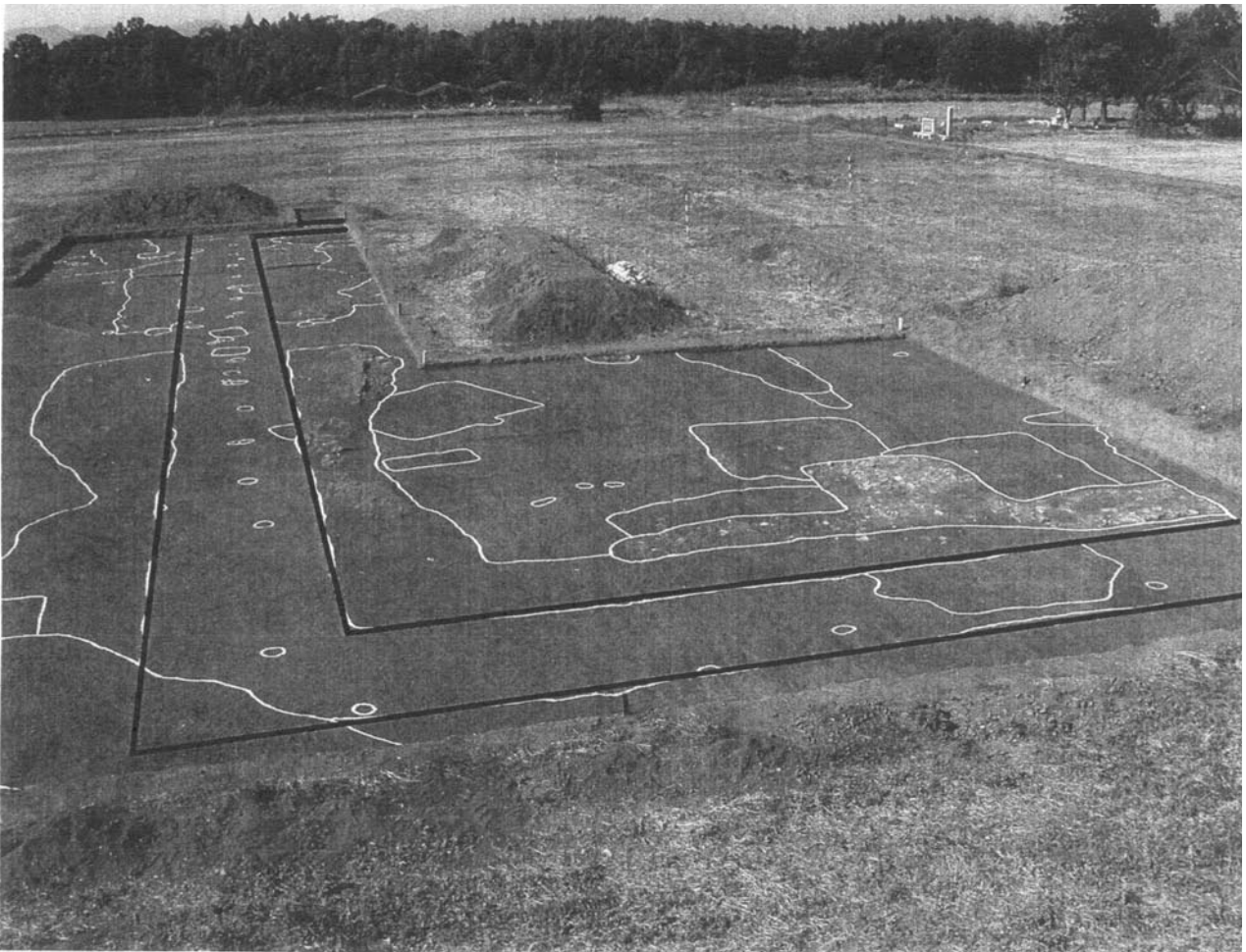


伊勢国分寺跡

第31次発掘調査現地説明会資料



築地の検出状況(黒線内)

2006年1月15日 13時30分から

鈴鹿市考古博物館

1. はじめに

国分寺とは奈良時代、^{しやうむ}聖武天皇の詔^{みことのり}（741年）により各国に置かれた寺院です。その背景には、仏典の教義にもとづき国家を平安に治めるという鎮護国家の理念がありました。国分寺は僧寺「^{こんこうみやうしてんのうごこのてら}金光明四天王護国之寺」と尼寺「^{ほっけめつざいのてら}法華滅罪之寺」からなります。鈴鹿市国分町に所在する伊勢国分寺跡は、1922（大正11）年10月12日に国の史跡に指定されました。この史跡は僧寺の遺跡と考えられています。尼寺の遺跡は、現在の国分町の集落一帯の国分遺跡がそうではないかと考えられています。

1988（昭和63）年度から1990（平成2）年度までに行われた範囲確認調査により、180m四方の^{ついでい}築地塀に囲まれた^{じいき}寺域（^{がらんち}伽藍地）が確認されました。その成果をもとに市では史跡の全域およびその周囲の公有地化を1995（平成7）年度から1997（平成9）年度にかけて完了しました。

1999（平成11）年度から、史跡公園整備に先立つ^{がらんち}伽藍（主要な建物などの堂塔）確認の調査に着手しました。同年度の調査では、まず^{こうどう}講堂の^{きだん}基壇（建物の台となる^{どだん}土壇）が確認されました。

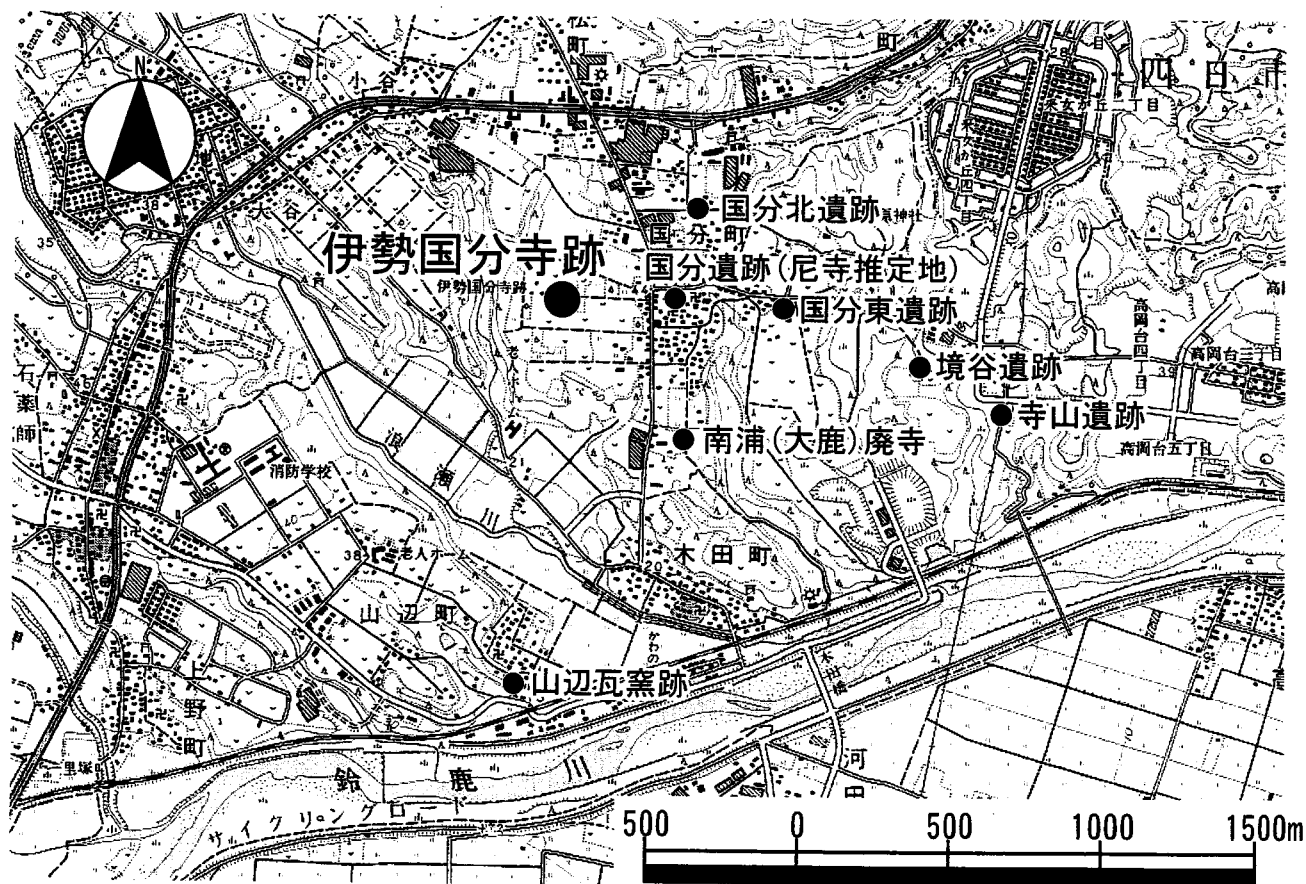
2000（平成12）年度には^{こんどう}講堂と^{こんどう}金堂の調査を行い、^{こんどう}講堂基壇の規模が東西32.7m×南北20.6mであること、^{そうげん}金堂基壇の創建期の規模が東西30.5m×南北21.9mであることを確認しました。

2001（平成13）年度には、東西19.5m×南北11.9mの^{ちゆうもん}中門基壇と、中門と^{こんどう}金堂を結び^{こんどう}金堂院を構成する東西68m×南北51m、幅7mの^{かいろう}回廊を確認しました。

2002（平成14）年度には、東西17.6m×南北11.2mの規模の^{なんもん}南門基壇を確認したほか、^{がらんち}伽藍地の東1/3が南北の築地によって区画され、その内部がさらに東西の築地塀によって区画されているのが確認されました。このことから、北東と南東の2つの院（区画）を形成しているのではないかと考えられるようになりました。伽藍地の南東隅からは大型の^{ほったてばしら}掘立柱建物が見つかりました。

2003(平成15)年度には、南東隅の掘立柱建物の北側にさらにもう1棟の掘立柱建物が見つかり、北東院からは食堂^{じきどう}と考えられる建物も見つかりました。講堂の北側からは東西72m×南北9mの規模と考えられる僧坊^{そうぼう}も見つかりました。

昨年度の調査では、これまでの調査で未確認の塔を確認するため、南東隅の掘立柱建物の西側を面的に調査を行いました。塔の存在を示すものは確認できませんでした。また、2002年度の調査で確認された伽藍地の東1/3を区画する南北の築地と北辺と南辺の築地との接点を調査しました。北辺では『T』字状に二本の築地が接するのを確認しましたが、南辺では南北の築地の痕跡を確認することはできませんでした。



遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

2. 今年度の調査

昨年度までの調査で塔が確認できていない状況の中、史跡公園整備に向けての計画的な年次調査の最後の年をむかえました。これまでの調査で、塔を建てることができたであろうと思われる空閑地がかなり限定されてきました。このため、今年度の調査では、伽藍地の東1/3を区画する南北の築地、さらにそれを南北に区画する東西の築地、南東隅の大型の掘立柱建物、そして昨年度の塔推定地調査区の内側に調査区を設定し、広い範囲を面的に調査することにしました。

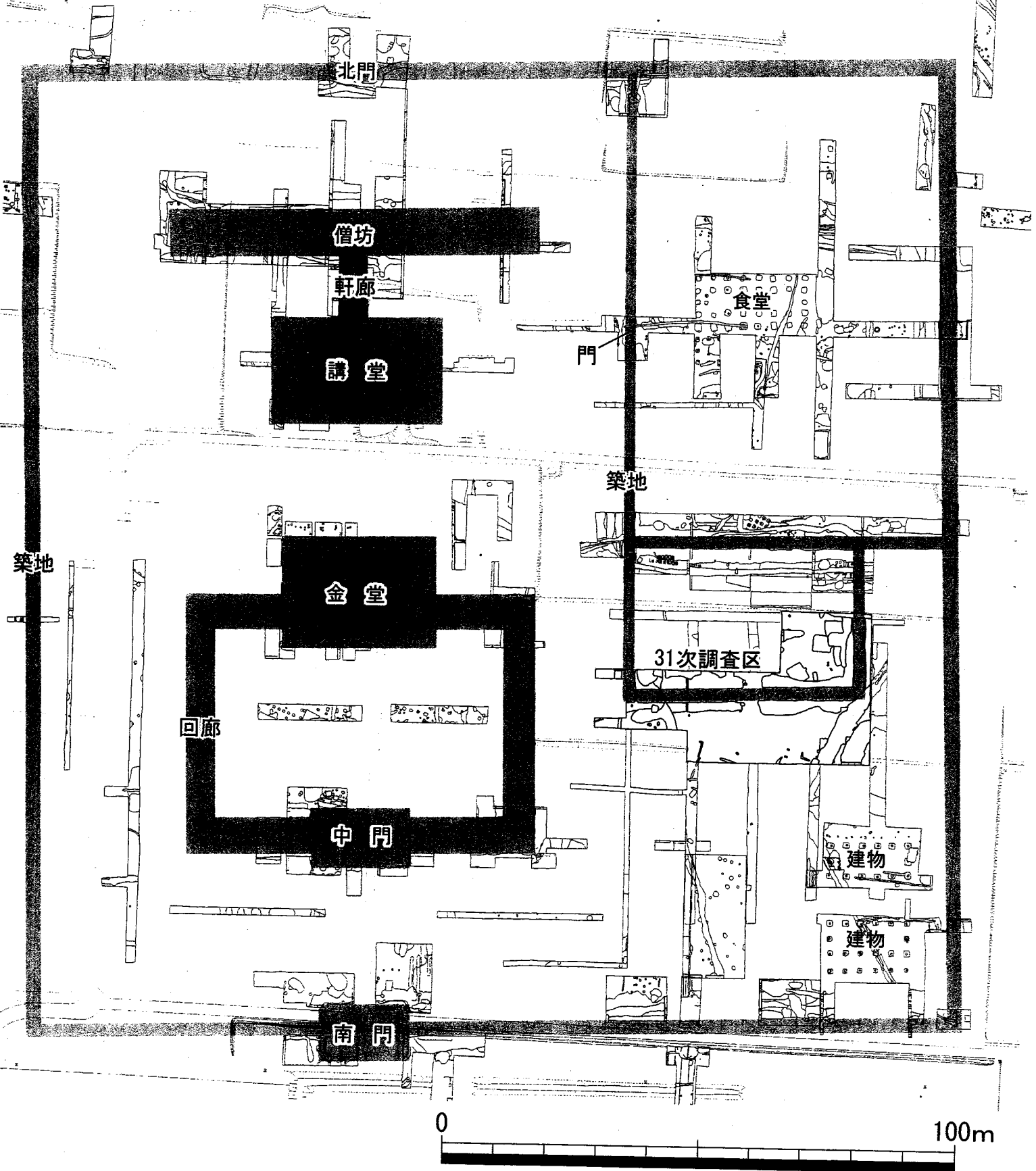
調査は遺跡の保存のためなるべく遺構^{いこう}検出までにとどめ、堆積^{たいせき}状況などを確認しなければならない場合のみ、最小限のサブトレンチを入れて断面の確認をおこないました。

3. 調査の概要

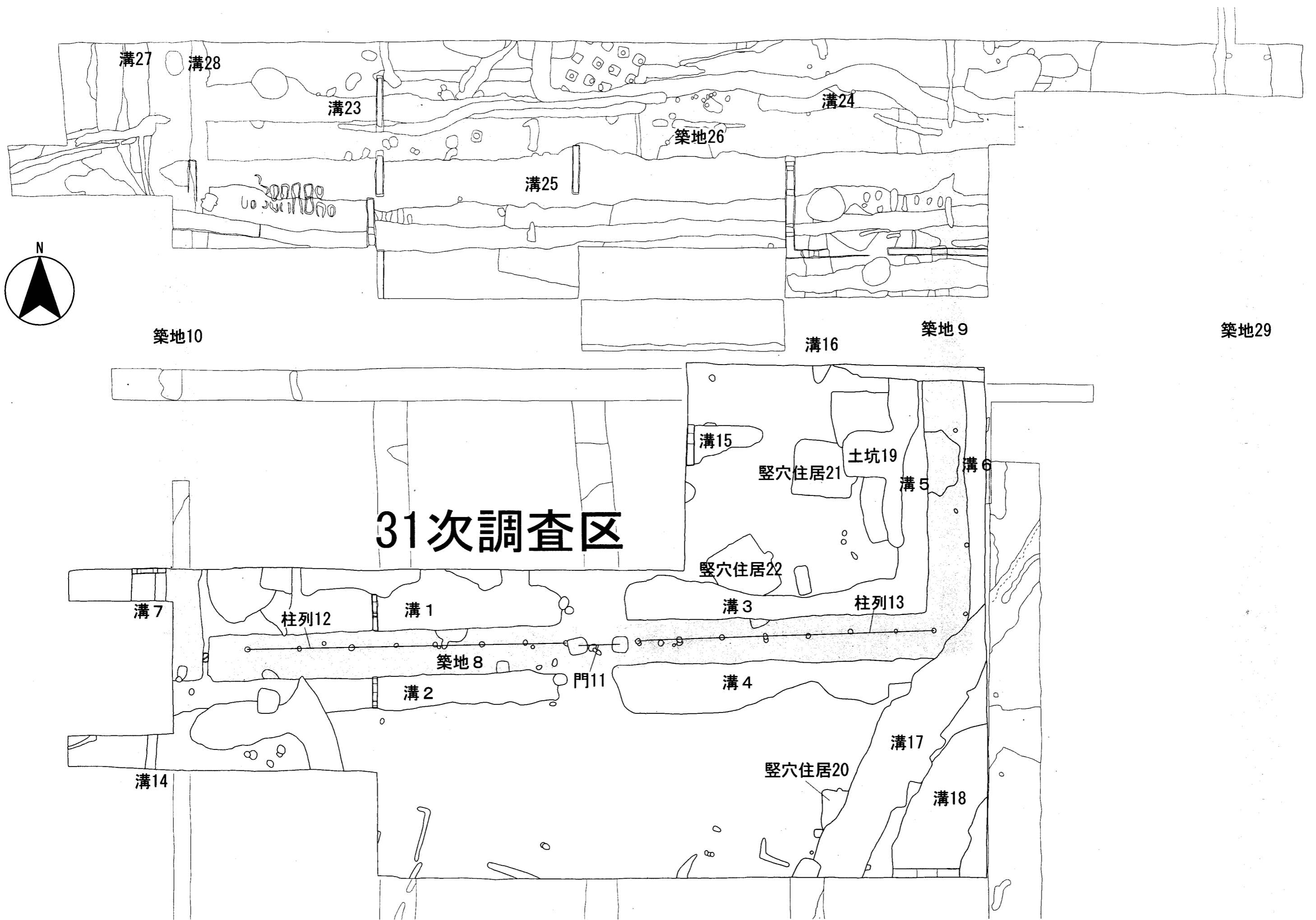
今回の調査で確認した遺構の主なものは、3基の築地^{ついで}とそれにとりなう溝、門1基、柱列^{はしられつ}2条、^{たてあなじゅうぎよ}竪穴住居3棟などです。

- 溝1 東西の溝で、調査区の中ほどで途切れます。全体に瓦^{かわら}を多く含みます。
- 溝2 溝1と並行する溝で、溝1と同様に調査区の中ほどで途切れます。
- 溝3 途切れた溝1の続きの溝です。東西の溝が調査区の東で北へ曲がりま
す。西側で瓦を多く含みます。
- 溝4 溝3と並行する溝です。溝17が上にあるため確認できませんが、
溝5に続くと考えられます。
- 溝5 北へ曲がった溝3の続きの南北の溝です。
- 溝6 溝5と並行する溝で、溝4が曲がった続きだと考えられます。
- 溝7 南北の溝で、一部に瓦を多く含む部分があります。
- 築地8 東西の築地で、上部は削られてしまっているため溝1・2・3・
4から推定されます。幅は2.5m程度ではないかと考えられます。

- 築地 9** 南北の築地です。これも築地8と同様に削られているため、溝5・6から推定されます。
- 築地 10** 南北の築地で、過去の調査で、溝27・28によって確認されています。これは伽藍地の東側1/3を区画する築地で、これまで、南辺の築地まで伸びると考えられてきましたが、今回の調査で北辺の築地から約122mの規模であったことが確認されました。
- 門 11** 溝1と3、溝2と4が途切れるところで確認されました。柱の間は約2.4mです。2基の柱穴しか確認されていないことから、簡易な門だったのではないかと考えられます。
- 柱列 12** 8基の柱穴からなる柱列で、^{さく}柵のようなものがあつたのではないかと考えられます。柱の間隔は約2.4～3mと一定ではなく、西へ行くほど広がります。
- 柱列 13** 柱列12と同じく8基の柱穴からなる柱列です。柱の間隔は約2.4mです。柱列12とほぼ一直線に並びます。
- 溝 14** 溝7の瓦を多く含む部分の続きです。溝7の本体がここでは確認できないことから、築地10が途中で終わっていることが確認できます。
- 溝 15・16** 東西・南北の溝で、建物にともなう雨落ち溝ではないかとも考えましたが、全体に北に寄り過ぎているため建物を建てるのは難しいようです。
- 溝 18** 調査区の南東隅の斜め溝で、^{しゅうこうぼ}周溝墓の溝ではないかと考えられます。
- 土坑 19** ^{どこう}瓦を多く含む土坑です。瓦を廃棄した土坑ではないかと考えられます。
- 竪穴住居 21** 東西3.7m×南北3.2mの規模です。東の張り出した部分に焼土が確認できます。
- 竪穴住居 22** 北東から南西3.6m×北西から南東3.5mの規模です。これも北東の張り出した部分に焼土を確認することができます。この竪穴住居からは6世紀後半～7世紀初頭の^{すえき}須恵器が出土しています。



伊勢国分寺跡第31次調査区位置図 (1 : 1,000)



遺構位置図・院推定復元図 (1 : 200)



4. まとめ

今回の調査では、築地8・9・10・26によって区画された小規模な院が確認されました。規模は東西45m×南北30mです。この院は、南に簡易な作りではありますが門がありました。調査で確認できた範囲でみると、築地9から東辺の築地である築地29まで18mという中途半端な空間を残していることや、築地8の下から柱列12と13が確認されていることから、当初から計画されていたのではなく急遽何かの施設を建てる必要に迫られ、一時的に柱列で柵を作り区画した後に、築地塀を作り院としたのではないかと考えられます。院内から明らかな建物などの痕跡を確認することができなかつたため、何の目的で作られた院のかは不明ですが、この院の性質については、次のような可能性が考えられます。

1. 布施院

都などでの労役に服するために往来する人々に、食事や宿などを提供する布施を行う施設

2. 国師院

僧尼の監督や経論の講義などを行った、国師（後に講師）と呼ばれる各国に1・2人置かれた僧のための施設

3. 施設の増築

何らかの理由で必要になった施設の増築。例えば809年に志摩国分寺が伊勢国分寺へ統合されたときなど

伊勢国分寺跡は遺跡の残り具合が非常に悪いため、これ以上可能性を探ることは難しいと考えます。このため、院の性質については、今後、全国の国分寺で行われる調査で類例が発見されるのを待ちたいと思います。

次に、伽藍地内の区画についてですが、昨年度の調査で、南北の築地10が北辺の築地まで存在していたことを確認しましたが、南辺の築地付近では確認することができませんでした。今年度の調査で確認された院の南側、築

地8との接点で築地10が終わっていることが確認されました。これによって、伽藍地の東1/3を区画する南北の築地によって構成された院は、食堂がある北東院と今回の調査で確認した院であったことが明らかとなりました。

最後に、今回の調査の大きな目的であった塔については、何ら手がかりを得ることができませんでした。このため、これまでの調査の結果から、伊勢国分寺については、築地塀で囲まれた180m四方の伽藍地内には塔がなかったという結論に至りました。

伊勢国分寺跡については、今年度が1999(平成11)年度から7年間に及ぶ計画的な年次調査の最終年度になります。国分寺には塔があり国分尼寺には塔がないことが文献や全国各地の発掘調査の結果などから通説となっています。しかし、尼寺であるという明確な証拠もこれまでの調査で発見されていないので、今後の着手予定の整備事業の中で伽藍地内だけでなく寺域(伽藍地)の範囲についても追加調査を行って塔についての検証をしていきたいと思っています。

